

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520432

研究課題名(和文) 形式と意味のミスマッチを示す構文の説明を求めて

研究課題名(英文) In search of accounts of constructions whose forms and meanings represent mismatches

研究代表者

高見 健一 (TAKAMI KEN-ICHI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70154903

研究成果の概要(和文):英語と日本語の形式と意味が必ずしも1対1に対応しない様々な構文、例えば、否定文、受身文、使役文、主語と動詞の呼応、存在文、所有文などを取り上げ、それぞれの構文の形式と意味がどのように対応しているかを考察した。そして、「機能的構文論」と呼ばれる文法理論の立場から、それらの構文が適切に用いられるための統語的、意味的、機能的条件を明らかにした。これらの研究成果は、4冊の著書を刊行し、11編の論文を執筆して公表した。

研究成果の概要(英文): I have taken up English and Japanese constructions whose forms and meanings do not necessarily show one-to-one correspondence, such as negative, passive, causative, existential and possessive sentences, and subject-verb concord, and examined how their forms correspond to their meanings in such constructions. I have further made clear the syntactic, semantic and/or functional conditions under which such constructions are appropriately used. As a result of my research, I have published four books and eleven articles.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：英語学・言語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語学、機能的構文論、意味、構文、形式

1. 研究開始当初の背景

(1) 生成文法を中心とする従来の言語研究では、文の意味は、その文を構成する各要素の意味の総和であると考えられてきた。しかし、認知文法や構文文法では、ある文や構文の意味が、それを構成する各要素の意味の総和ではなく、むしろそれ以上の意味を伝達する場合があることが指摘されるようになった。そして、「構文」という単位が認定され、様々

な構文の形式と意味がどのようにマッピングされるかが大きな研究課題となってきた。

このような言語研究の流れの中で、文の表す意味と、その文を構成する各要素の意味の総和が必ずしも1対1には対応しない構文を取り上げ、そのような構文の形式と意味がどのように対応しており、両者のミスマッチがどのような形で説明できるかを考察することは極めて意義深いと考え、本研究を行な

うようにした。

(2) 近年の統語論、意味論研究においては、様々な構文の適格性を説明する際に、自動詞を非能格動詞 (=主語の意図的行為を表す自動詞) と非対格動詞 (=主語の非意図的事象を表す自動詞) の2種類に区別する「非対格性の仮説」が大きな役割を果たしている。そして、本研究で取り上げようとした構文に関しても、その適格性をこの立場から説明しようとする研究が見られた。しかし、これらの構文の適格性は、このような動詞の意味の違いだけでは十分な説明が難しく、文全体の意味やその機能、話し手と聞き手の語用論的知識なども重要な役割を果たすと以前から考えていたので、本研究で扱う構文の適格性条件を「機能的構文論」の立場からより深く考察しようと考えた。

2. 研究の目的

英語や日本語の様々な構文において、その文全体の表す意味と、その文を構成する各要素の意味の総和が、1対1には対応しない場合や、その文の形式と意味の間にズレが生じる場合が多くある。本研究では、このような形式と意味のミスマッチが観察される以下のような構文を取り上げ、そのような形式と意味のミスマッチがどのような形で説明できるかを明らかにしようとした。そしてそれぞれの構文がどのような条件のもとで適格となったり、2つ(以上)の意味を表すのかを説明することが本研究の目的であった。

- (1) 英語の構文: time-away 構文、場所句倒置構文、分裂文・疑似分裂文、疑問のターゲットと動詞句削除、主語名詞句と動詞の呼応
- (2) 日本語の構文: 存在文・所有文、「何を文句を言ってるの」構文、動詞句前置構文、数量詞遊離構文
- (3) 日英語の構文: 使役文、否定文、受身文

そして、上記のような構文の形式と意味の対応関係を説明したり、それぞれの構文の適格性を説明する際に、従来から提唱されている純粋な統語的分析や、文の一部を構成する動詞の意味のみに基づく分析が不十分であることを示すとともに、文の意味や機能、文脈や語用論的知識などに依拠する「機能的構文論」によるアプローチによる説明が必要であることを示したいと考えた。

研究代表者の高見は、これまで約20年にわたり、「機能的構文論」の創始者である現ハーバード大学名誉教授、久野暁氏との国際共同研究において、英語と日本語の様々な構文を分析し、これらの構文の適格性が、単に動詞の意味のみに依存する現象ではなく、動詞の意味に加え、文の意味や機能、語用論的知識に依存する現象であることを示し、意味

的、機能的分析を提案した(高見・久野(2002, 2006)、Kuno and Takami(1993, 2002, 2004)等参照)。そして、これらの研究で扱った構文は、One's Way 構文、同族目的語構文、疑似受身文、結果構文、主語名詞句からの外置構文、日本語の被害受身文など、形式と意味が1対1には対応しない構文である。本研究は、このような一連の研究の延長線上にあり、形式と意味のミスマッチを示す構文の説明を行なうとともに、それらの構文の適格性条件を明らかにしようとしたものである。

3. 研究の方法

2.の「研究の目的」欄に記した構文の形式と意味やそのミスマッチ、構文の適格性条件を考察するにあたり、これまでに様々な文献で提出されている説明や代表的な例文を整理し、その妥当性や問題点を十分に検討したのはもちろんであるが、本研究の方法として顕著なのは次の2点である。

(1) 本研究は、ハーバード大学名誉教授、久野暁氏との国際共同研究であり、電子メール等を利用して頻繁に連絡を取り、討議を重ねて論文を共著で書き進めた。また、東京とボストンで年に1、2回、直接会って研究の促進をはかった。

(2) 本研究の英語の様々な構文の適格性判断や例文に関するコメントを、特に2人の米国マサチューセッツ州在住の母語話者、Karen Courtenay氏とNan Decker氏(ともに言語学 Ph. D.)に頻繁に依頼し、極めて多くの示唆を得た。また、英語の論文の校閲も2人に依頼した。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果として、4冊の著書を刊行し、11編の論文を執筆して公表するとともに、5つの研究発表を行なった。そしてこれらの研究成果を通じて、次の5つの点に関して、特に大きな意義があったと考えられる。

(1) 2.の「研究の目的」欄に記した様々な構文の形式と意味のミスマッチやそれぞれの構文の適格性条件を考察する上で、従来から提唱されている純粋な統語的分析や、文の一部を構成する動詞の意味のみに基づく分析は不十分であり、文の意味や機能、その文が用いられる文脈等を考察する必要があることを明らかにした。そして、これまで他の構文を説明する上で久野暁氏と提唱してきた「機能的構文論」によるアプローチが、これらの構文を説明する上でも不可欠であることを示せたと考えられる。

(2) これまでの研究では、限られた例文に基

づいてそれぞれの構文の適格性や意味と形式の一般化がなされる傾向が強かった。しかし、本研究で母語話者やインターネットから多くの例文を収集した結果、従来提唱されてきた分析に多くの反例や問題となる例があることが明らかになったことは大きな成果であると考えられる。そして、このような反例や問題となる例をも含めて説明できる仮説を提示できたことは大きな収穫であった。

(3) 近年の統語論や意味論研究においては、本研究で考察した構文の説明に、自動詞を非能格動詞と非対格動詞に区別する「非対格性の仮説」が大きく関与しているが、このような分析だけでは、上記の構文を十分に説明できず、文全体の持つ意味やその機能、その文が用いられる文脈や話し手・聞き手の了解事項などにも十分な考慮を払わなければならないことを明示的に示せたことも大きな意義があると考えられる。

(4) 高校生から成人までの一般読者を対象に、久野暉氏と次の2冊の英文法に関する本を刊行し、本研究の成果を社会に広く還元できた。

①『謎解きの英文法—否定—』（くろしお出版）英語の否定の仕組みや否定文に関して詳しく考察し、専門用語を使わず、一般読者に分かりやすく、否定のメカニズムを解き明かした。特に、「文否定」と「構成素否定」の違い、二重否定の仕組み、「部分否定」と「全体否定」の違い、anyのような否定対極表現が用いられる文脈、a few と few の違い、barely の使われ方、only と否定の関係などを分かりやすく説明した。その結果、多くの一般読者から好意的な反響が多数寄せられた。

②『謎解きの英文法—単数か複数か—』（くろしお出版）英語の主語と動詞の呼応関係や集合名詞の使い方、単数と複数の概念などについて幅広く解説した。特に、一般に複数形で用いられる名詞、主語と動詞の呼応に関して形と意味がミスマッチを起こす場合、集合名詞はどのように数えるか、集合名詞と動詞の呼応、スポーツチーム名や音楽グループ名、会社名が主語にきた場合の動詞の呼応、none of us, neither of us のような名詞句が主語になった場合の動詞呼応、themselves という表現についてなど、今まで明らかにされていない事柄を多く盛り込んで、分かりやすく解説した。その結果、多くの一般読者から好意的な反響が多数寄せられた。

(5) 英語教師を目指す教育学部の大学生と現職の中学、高校の英語教師百名を対象に、「授業に役立つ英文法講義」の講演を行ない、英語の数と呼応、Cause 使役文とその受身文、

英語の動詞句削除の3つのテーマで発表した。本研究の社会的還元として意義があったと思われる、実際、聴講した多くの学生や現職教師から、意義深く、大変役に立ったとの感想が寄せられた。

以下、主要な著書と論文の概要と成果について言及しておきたい。

『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論—』（久野暉氏との共著、開拓社）

本書は、文の構造を重視する「生成文法」の視点と、文や談話の意味や機能を重視する「機能的構文論」の視点から、次のような英語の現象を考察したものである。

- 1 動詞句削除現象
- 2 名詞を修飾する前置詞句の積み重ね
- 3 one による名詞（句）の置き換え
- 4 疑似数量副詞 too, even, also の修飾要素
- 5 疑似分裂構文
- 6 空所化 (Gapping)
- 7 否定対極表現の認可条件
- 8 have, make, get, let を用いた使役文
- 9 場所句倒置構文

これらの構文の適格性や曖昧性を説明するのに、生成文法と機能的構文論を用いて、これまでに提出されていない新しい分析を提出し、多くの新しい事実を提示できた。また、従来の生成文法による説明が妥当でない場合は、その問題点を指摘して、代案として、機能的構文論の立場から説明を行なった。本書は、多くの英語の構文を扱っており、新しい提案を多く行なっているため、その点が評価されてか、多くの研究者や大学院生、学生から好意的な感想が多数寄せられた。

『受身と使役—その意味規則を探る—』（開拓社）

本書は、日本語と英語の受身文と使役文に関して、その意味規則を明らかにして、適格性条件を明示したものである。日本語と英語の受身文がどのような場合に適格となるか、またその適格性条件の違いは何か、日本語の間接受身文の仕組みと適格性条件は何か、日本語と英語の他動詞による語彙的使役と「一さす/させる」、make, cause, get, have, let などを用いた迂言的使役の違いは何か、また、これらそれぞれの迂言的使役の違いは何か、など、広範なテーマに関して、詳しく論じた。これまでに指摘されていない多くの事柄が明らかになったので、日英語の受身と使役を考察するこれからの多くの研究者にとって大いに役立つことと思われる。

「日本語の動詞句前置構文」『日本語文法』8:2 (久野暉氏と共著)

この論文は、「*降りさえ雨がした」のような日本語の動詞句前置構文の適格性、不適格性がどのような条件に左右されているかを議論し、我々が2006年の著書『日本語機能的構文研究』（大修館書店）の中で提示した機能的仮説に対する畠山・本田・田中（2007）の反論に答えたものである。畠山等は、この現象が統語論的に説明できると主張するが、その主張には多くの問題があり、妥当ではないことを示した。そして、この現象は、「さえ」が修飾する要素と、動詞句が前置される際の作用域が決定的要因であることを論証した。

『何を文句を言ってるの』構文の適格性条件』『日本語文法』10:1

この論文は、「何を文句を言ってるの」のように、「何を」という疑問詞が、目的語ではなく、むしろ「なぜ、どうして」のような付加詞に近い意味で用いられる文の適格性を考察したものである。Kurafuji (1996) は、この構文には、(i) 他動詞と非能格動詞のみ現れ、非対格動詞や受身形動詞は現れず、(ii) 否定文は生じない、と主張しているが、この論文では、これらの主張が妥当でないことを示した。そして、この構文は、話し手が想定していた状況とは逆の状況に接し、(聞き手に) なぜそのような状況なのかと反語的に問い、疑念や叱責、苛立ち等の意味を表す場合に適格になるという意味的、機能的制約を提案した。

この論文が多くの反響を呼んだようで、この論文の発表のあと、本論文が刺激剤となって書かれた論文が発表されたり、多くの研究者から様々な意見や反応をもらった。

「否定極性への機能論的アプローチ」『否定と言語理論』

生成文法の統語論的分析では、日本語の「ろくな/大した … ない」という否定対極表現は、他動詞の目的語と非対格動詞の主語にはつくが、他動詞の主語と非能格動詞の主語にはつかないと主張されている。また、日本語で、「彼らは何を騒いでいるの?」のように、「何を」が「なぜ」の意味で用いられる構文では、動詞が非能格動詞か他動詞なら適格であるが、非対格動詞なら不適格であり、さらに否定文の場合は、「*彼らは何を騒いでいないの?」のように不適格になると主張されている。しかし、本論文では、これら2つの主張はどちらも妥当でなく、これら2つの現象は、統語論的要因ではなく、意味や機能、話し手と聞き手の語用論的知識に大きく依存していることを示した。そして、具体的に

は、「ろくな … ない」表現は、その文の含意が私たちの社会常識や文脈と適合し、その文の表す意味内容(断定)が、私たちの社会習慣から考えて容易に想起され得るものであれば、適格となることを示し、「大した … ない」表現は、その文の表す意味内容(断定)が、私たちの社会習慣から考えて容易に想起され得るものであれば、適格となることを明らかにした。さらに、「彼らは何を騒いでいるの?」のような表現は、話し手が、Xであるべきでない、Xでないはずだと考えていたのに対し、Xである状況に接して驚いたり不審に思って、聞き手に「どうしてXなのか」と反語的に言い、疑念や叱責の意味を表す場合に適格となることを示した。

“Causative and Intransitive/Transitive Verbs” Kuno, S. et al. ed. *Aspects of Linguistics*.

この論文では、(i) 日本語の自動詞が対応する他動詞を持つ場合、他動詞形と使役形の間にはどのような意味の違いがあるか、(ii) 自動詞が対応する他動詞を持たない場合、「さす」使役形と「させる」使役形の間にはどのような意味の違いがあるか、を明らかにした。そして、これらの問題に対して、当該の使役事象が、使役主と被使役主のどちらの力や意志によって引き起こされているかが、決定的要因であることを示した。

「Cause 使役文とその受身文」『英語青年』154:12

従来、Cause 使役文は偶発的、無意図的な使役を表し、deliberately, intentionallyのような主語の意図性を表す副詞とは共起しないとされてきた。また、Cause 使役文は受身形にならないと言われてきた。しかし、本論文では、これら2つの主張がどちらも妥当でないことを明らかにした。そして、Cause 使役文は、使役主が何かを意図的に行なって被使役主の制御できない事象を引き起こしたり、使役主が原因となって当該の被使役事象が非意図的に起きる場合に用いられることを明らかにした。また、Cause 使役受身文は、科学的文書や法律文書など堅い文語表現に用いられ、被使役事象が、使役主の意図性にかかわらず、被使役主を直接対象として、被使役主に直接働きかけて引き起こされる場合に適格となることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

① 高見健一 (2010) 「否定文」、『ことばの意味と使用』(澤田治美・高見健一(編))、

- 80-90. 鳳書房。査読無。
- ② 高見健一 (2010) 「否定極性への機能論的アプローチ」、『否定と言語理論』(加藤泰彦他 (編))、357-377. 開拓社。査読有。
 - ③ 高見健一 (2010) 「Cause 使役文の意味」、『英語研究の次世代に向けて』(吉波弘他 (編))、105-116. ひつじ書房。査読有。
 - ④ 高見健一 (2010) 「どうして “I like cat.” ではいけないのか?」『英語教育』59 巻 6 号、14-15. 査読無。
 - ⑤ 高見健一 (2010) 「『何を文句を言ってるの』構文の適格性条件、『日本語文法』10 巻 1 号、3-19. 査読有。
 - ⑥ 高見健一 (2009) 「Cause 使役文とその受身文」、『英語青年』154 巻 12 号、709-712. 査読有。
 - ⑦ 高見健一 (2009) 「機能的構文論」、『言語学の領域 (I)』(中島平三 (編))、244-265. 朝倉書店。査読有。
 - ⑧ 高見健一・久野暉 (2008) 「日本語の動詞句前置構文」、『日本語文法』8 巻 2 号、54-70. 査読有。
 - ⑨ 高見健一 (2008) 「生成文法は認知・機能文法とどのように折り合うのか」、『言語』37 巻 11 号、72-77. 査読有。
 - ⑩ Ken-ichi Takami (2007) “Causative and Intransitive/Transitive Verbs” *Aspects of Linguistics: In Honor of Noriko Akatsuka* (eds. By Susumu Kuno, Seiichi Makino & Susan Strauss). 199-219. Kurosio Publishers. 査読有。
 - ⑪ 高見健一 (2007) 「英文法の『常識』は本当に正しいか」『英語教育』56 巻 6 号、18-22. 査読有。

[学会発表] (計 5 件)

- ① 高見健一 (2010) 「授業に役立つ英文法講義」高知英語学英語教育研究会。2010 年 12 月 11 日、高知大学。
- ② 高見健一 (2010) 「日英語使役表現の形と意味」認知神経心理学研究会。2010 年 8 月 8 日、東京学芸大学。
- ③ 高見健一 (2010) 「英語の数と呼応一形と意味のミスマッチー」日本言語学会。2010 年 6 月 20 日、筑波大学。
- ④ 高見健一 (2010) 「日英語の使役表現」日英言語文化学会。2010 年 6 月 12 日、明治大学駿河台校舎。
- ⑤ 高見健一 (2007) 「英語の場所句倒置構文一文中的位置と機能」新潟大学東西言語類型論研究会。2007 年 12 月 17 日、新潟大学。

[図書] (計 4 件)

- ① 高見健一 (2011) 『受身と使役—その意味規則を探る—』開拓社、219 ページ。
- ② 久野暉・高見健一 (2009) 『謎解きの英文

法—単数か複数か—』くろしお出版、235 ページ。

- ③ 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論—』開拓社、322 ページ。
- ④ 久野暉・高見健一 (2007) 『謎解きの英文法—否定—』くろしお出版、206 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高見 健一 (TAKAMI KEN-ICHI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70154903

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：